



Title	後期中等教育における高等専修学校の研究 : 高校教育に対する「補完」の実態 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	山田, 千春
Citation	北海道大学. 博士(教育学) 乙第7105号
Issue Date	2020-09-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/79738
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Chiharu_Yamada_abstract.pdf (論文内容の要旨)



[Instructions for use](#)

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（教育学）

氏名：山田千春

学位論文題目

後期中等教育における高等専修学校の研究 — 高校教育に対する「補完」の実態 —

高等専修学校は、中学卒業生が進学する後期中等教育段階の学校である。本研究の目的は、3年制の高等専修学校の全日制高校に対する補完のありようを北海道の事例を通して明らかにすることである。それによって、高等専修学校が地域で果たしている実態を明らかにし、今後の後期中等教育における高等専修学校の可能性を探ることができると考えた。

研究目的を明らかにするために、本研究では次の4つの課題を設定した。第1は、北海道内の事例を通して、高校教育が拡大していく1960年代（第一次ベビーブーム世代が高校生になる頃）から1990年頃（第二次ベビーブーム世代が高校を卒業する頃）までの高等専修学校が教育機会の供給で果たしてきた役割について検討することである。第2は、卒業生から高等専修学校への進学動機を整理し、中学校で課題を抱えた生徒の進路選択のパターンを明らかにすることである。第3は、北海道の1つの高等専修学校を事例に、地域社会の教育ニーズの変化と高等専修学校の役割の変化を検討することである。第4は、当事者（卒業生）による高等専修学校の教育活動の評価を行うことである。

以上について明らかにし、高等専修学校の全日制高校に対する補完のありようを考察するため、主に3つの聞き取り調査を実施した。最初は、北海道内の高等専修学校の管理職6名への聞き取り調査、次は、北海道内の高等専修学校教員6名への聞き取り調査、最後は、北海道内の高等専修学校の卒業生15名への聞き取り調査である。さらに、1校（B校）の歴史的な変遷を描くため、B校の理事長の聞き取りも行った。

本論文の各章の内容は次の通りである。

序章では、定時制高校、通信制高校（サポート校なども含む）、高等専修学校など、非主流の後期中等教育機関に関する先行研究を整理し、本研究の目的と課題を設定し、各章の概要を説明した。

第1章では、高等専修学校（その前身である各種学校）の特徴について整理をした。文献や「学校基本調査」などを参考に、各種学校の歴史や高等専修学校になってからの特徴について述べた。さらに、現在の非主流の後期中等教育機関の全体像を概観し、後期中等教育における高等専修学校の位置づけを明らかにした。

第2章では、多くの高等専修学校が活用している技能連携制度について、制度のおこりと各種学校へ技能連携制度の対象が拡大されていった経緯を述べ、高校生拡大期の1960年代後半から1990年の初めにかけて、この制度を活用し、高等専修学校を含む技能連携施設が全日制高校の補完的な役割を担っていたことを明らかにした。

第3章では、北海道内で行った3年制の高等専修学校の管理職に対するインタビュー調査をもとに、全日制高校に対する高等専修学校の多様な補完のありようを検討した。その結果、大きく2つのタイプに分類することができた。1つは、全日制高校タイプの学校で、もう1つは、職業教育にウェイトをおく、専修学校タイプの学校である。全日制高校タイプの学校は、学校文化も全日制高校と変わらず、全日制高校の代替であり、専修学校タイプの学校は、小規模で規則が緩く、そこでしか学ぶことのできないものもあり、全日制高校とは異なる職業教育を中心とした学校であることが明らかとなった。

第4章では、道内の1つの高等専修学校を事例に、その変遷を地域の教育ニーズとの関

連から検討をした。女性の社会的自立のために創設した街角の編物学校が、地域の教育ニーズに応える形で、技能連携制度も上手く活用しながら、「疑似全日制高校」へと変容していったことが明らかとなった。B校の経営者は、地域の教育ニーズを汲み取りながら、学校のありようを変化させ、地域に必要な学校として現在に至っていた。1960年代から現在まで、全日制高校の補完として機能しているが、時代や周囲の高校の影響を受け、その補完のありようも変化していることが確認できた。

第5章では、卒業生や教員の聞き取り調査から、高等専修学校における教育の実態を明らかにし、生徒にとっての高等専修学校の教育の意義について検討を行った。その結果、「勉強に興味がなかった、勉強が苦手だった生徒に対して、専門教科の授業を中心に勉強の楽しさを体験させる授業が展開されていた。」「全日制高校と同じような、行事を中心とした教育活動が存在し、卒業生たちはそれらの活動を通して集団における学びを体験していた。」ことが明らかとなり、高等専修学校では10代後半に必要なと考えられる「学ぶ楽しさの経験」や「集団における学び」について、その機会が与えられていたことが分かった。

本研究で明らかとなったのは次の4点である。

第1に、高校生拡大期の1960年代後半から第二次ベビーブーム世代が高校を通過する1990年の初めぐらいまでは、高等専修学校は技能連携制度を活用し、全日制高校から漏れてしまった生徒の補完として機能していた。

第2に、卒業生は、自身の学力をベースに進学先を選択しているものの、現在は、全日制高校の単なる補完だけではなく、職業に関する専門教科への興味関心や中学までの人間関係をリセットするために、非主流の高等専修学校へ進学していた。中学校での通級生徒などは、普通の生徒として見られたくて、全日制高校スタイルのB校へ進学し、中学の不登校経験者も後期中等教育への進学を機会に普通になりたくて普通っぽいB校へ進学していた。本研究からは、高等専修学校であるB校が地域のニーズを汲み取り多様なタイプの生徒に教育機会を与えたことによって、結果、「普通の生徒でいたい」という生徒のニーズに答えていたことが分かった。

第3に、定時制高校が地域社会の変化によって入学する生徒層が変化し、社会的機能を変容させたのに対して、高等専修学校は、地域社会の教育ニーズを積極的にキャッチし、学校自体を変容させながら存続していた。定時制高校と同じく、全日制高校の数的な受け皿から、1990年以降、何かしら困難を抱えた生徒の受け皿へと質的な転換が図られたことが明らかとなった。

第4に、「高卒資格の取得」だけではなく、学校不適應の生徒に対して、全日制タイプでの学校生活の機会を与え、その中で職業に関する専門教科を柱に勉強の楽しさを体験させ、学校行事を通して集団での学びを体験させている学校であった。

つまり、高等専修学校は量的に全日制高校の補完としての役割を担っているが、教育の内容において、全日制高校タイプの高等専修学校は、全日制高校の代替的な学校として存在し、専修学校タイプの高等専修学校は、職業教育を中心としたオルタナティブな学校として存在していることが北海道の事例から明らかとなった。

本研究を通し、後期中等教育における高等専修学校の可能性として、「専修学校の設置基準の緩やかさを活かし地域に必要なタイプの学校を創設すること」「3年制の資格取得型（理美容・調理など）の学校を増設すること」「高等専修学校卒業後、短期の就職サポートコースを学園内に創設すること」以上の3点をあげることができる。今後の研究課題は、文化・教養分野の夢追い型高等専修学校についての実態を明らかにすることと、B校と同じタイプ・異なるタイプの高等専修学校について、学校のある「地域社会」との関係性を軸として検討を行うことである。